

種子島の大踊りについて

大踊りは「大きな規模の踊り」のことをいい、一般的には50～60人程度の大人数で踊られます。また、大踊りは太鼓をたくさん伴う踊りで、南九州では「太鼓踊り」とも呼ばれています。大太鼓は両手にバチを持ってたたく「両バチ」と片手に太鼓、もう片手にバチを持ってたたく「片バチ」とがあり、両バチは「農民の踊り」、片バチは「武士の踊り」とされています。

踊りの種類は「安城踊り」「さんご踊り」「しんご踊り」「源太郎踊り（南種子町では中踊りとされています）」他、などがあります。踊りは、室町時代後期～近世初期の歌がよく歌われていますが、長い間、踊りが伝承される中で、少しずつ異なったものになって来ているようです。

種子島の大踊りの特徴としてあげられるのが「歌の存在」で、本土の太鼓踊りの多くが「楽器のみ」になっているのに対して、歌を歌いながら踊られていることだそうです。大踊りでは小太鼓（入れ鼓）と鉦の人たちが歌を歌い、大太鼓の人たちが囃子をかけます。

安城踊り

「安城踊り」は、大踊りの中でも最も多く踊られている代表的な大踊りです。名称の由来は、西之表市の「安城」地区から島内に伝わったことで、そう呼ばれています。

安城大野集落の古老によると、何百年か前、大阪堺の商人がシケのため大野海岸に船を寄せ、集落民の救護を受けたお礼に教えた踊りそうです。



上中 西之町の「安城踊り」

さんご踊り

島間 上方の「さんご踊り」

「さんご踊り」は、昔、「さんご」と「しんご」という兄弟がおり、この兄弟の名をとって、それぞれ「さんご踊り」



「しんご踊り」と呼ばれています。いずれも「安城踊り」に比べると、おとなしい踊りといわれています。しかし、島間上方集落の「さんご踊り」は、戦争から帰ってきた人たちが、この「さんご踊り」の練習は「戦争よりも激しい」といったほど、激しい踊りだそうです。「エビラ持ち」といって、踊りの輪の外側に弓や鉄砲を持った人たちが逆回りに回って踊ります。

西之本村の「さんご踊り」は、国土安穩・松様・比翼連理などの歌があり、昔、荃永の阿多羅経（あらいきょう）の人が、西之本村の人たちから踊りを教えてもらったそうです。荃永では現在、この踊りを「比翼連理」と呼んで、願成就祭りなどで奉納しています。



西之 本村・崎原の「さんご踊り」

荃永 下之町の「比翼連理」



源太郎踊り(げんだら踊り)

平山 西之町の「源太郎踊り」

「源太郎踊り」の発祥地は西之表市の住吉で、ここから全島に伝わったといわれています。本来は大踊りに分類される踊り



といえますが、南種子町平山西之町集落や広田集落では、中踊りとして踊られています。特に、西之町集落の源太郎踊りは両バチで太鼓をたたき、大踊り化しているともいわれています。

また、荃永地区では源太郎踊りを「山口踊り」と呼んでいます。女性は着物姿で扇子を持ち、頭には年齢に応じて、ハチマキや風呂敷を被ります。



荃永 仲之町の「山口踊り」